

40

〈 創刊 20 周年 記念 号 〉

平成16年 4 月 8 日

明珠

龍泉院  
参禅会会報



## 〈対談〉『従容録』に学ぶ

龍泉院参禅会の会報として『明珠』が春秋の年二回発行されて、二〇年になるうとしています。巻頭を飾ってきたのは当参禅会の気風を充分伝える椎名老師による「従容録に学ぶ」でした。記念号の折は休みましたが、百則のうち今まで三四の則を、分かりやすくかみくだいて解説していただきました。発刊四〇号の節目にあたり『明珠』の眼睛である「従容録に学ぶ」をいま一度、じっくり味わっていたら、と、対談をお願いしました。

**編集部** 『明珠』三〇号で小畑さんに『従容録』の味読について書いていただきましたが、読者のために、今あらためて『明珠』の巻頭に御老師が書かれている「従容録に学ぶ」についてお話をいただきたいと思えます。

**老師** これを取り上げた経緯は、そのころ『明珠』の編集をされていた小畑さんから、『従容録』を分かりやすく、くだいで載せてもらえないかという要望がありまして、書き始めたということです。

**小畑** 坐禅を始めた頃、永平寺の副貫首をなさっておられた福井天章老師のご提唱をいただいたことがあります。その時、曹洞宗では『従容録』は大事なものだということでもテキストとして使っていました。昭和四〇年頃

で三百円の本でした。ご提唱は一ヶ月に三回。私は中途で入り、お休みのときもあつたので、四、五年間ほど続けましたが、当時はよく分りませんでした。お聞きしたいのは、これは耶律楚材（湛然居士）という在家の者が万松禪師から頂いたものでしょうか。

**老師** ええ。この人の九度に及ぶ懇請に応えて著したものです。耶律楚材は在家ですが、並の坊さんよりも仏教や禅の知識は相当なものだったんですね。しかも参禅をしていた。  
**小畑** 三年間びつちり寝食を忘れて坐禅したそうですね。

**老師** 万松行秀という禅匠に隨身するくらい私淑した、それほど熱心な仏教信者だった。湛然居士という名も万松さんからもらっている。ですから万松さんには絶対帰依だったんですね。

**小畑** 湛然居士（耶律楚材）という人は金が減びた時にフビライに進言して北京を無血開城し、殺戮を避けたという有名な話があります。これはやはり仏教の影響によるのでしょうか。

**老師** そうだと思います。若いときから仏教に参じていたというのが、精神的な支柱になっていたと思います。

### 耶律楚材と万松禪師との出会い

**小畑** 当時、禅は南の方が大変盛んだったようですが、どうして北の方だったんでしょう。  
**老師** それはやっぱり万松さんの偉さでしょうね。それと、金も元も宋の時代をうけて非常に仏教を重んじたんですね。

ところは大都、今の北京。万松さんが都で一番大きなお寺の住職になり、そこへ耶律楚材という人は高官ですが、万松さんに絶対帰依をしたことで、禅が栄えたんですね。

**小畑** 二五歳ぐらいのときに参禅するんですね。

**老師** そうです。若いときですね。

**小畑** 元になる前、金の減びる少し前だったようです。

**老師** 金はいへんな仏教国でした。そして金の北方には西夏という砂漠の中の国、今の内モンゴルあたりが中心だった。その西夏も猛烈な仏教国だった。そういう国々を占領したこともあって、元はフビライ以下の歴代の皇帝たちが仏教に帰依しました。高官のなかでも湛然居士は第一等の人です。そういう背景があって、万松さんが都の大きな寺で禅を鼓舞することができた。

ついでにいえば、万松禪師のお弟子さんに雪庭福裕という人がいるんです。その方がまた優れた人で、嵩山少林寺を復興した住職だった



た。そのほか万松さんの下から優れた人がたくさん出まして、中国の北地で曹洞宗の禪が相当な力をもっていた。

南の方では元の時代、曹洞宗は細々としか存続しなくて、明代になるとやがて滅びてしまふ。反対に金・元の時代から北地で盛んになっていた曹洞宗が明末には南の浙江省、福建省のほうへ流れが伝わり、臨済宗と覇を争うくらい盛んになる。面白いですね。

江戸初期に水戸で祇園寺を開いた東皐心越禪師という人が日本へきています。この方は、南の方にいった曹洞宗の流れを汲んだ人です。だから万松行秀は歴代の曹洞宗の中でも大きな地位にあるんですね。

## 日本に渡った『従容録』

**編集部** そうすると『従容録』として日本に入ってきたのは、明の時代ですか。

**老師** いや、もっと早いです。心越禪師は明代の人ですが。

**小畑** 『従容録』が日本で重んじられるというのは南北朝時代から思っていました。

**老師** いいえ、恐らく中世末期以後でしょう。では、中世の禪者が、こういう類いの本で何を読んでいたかというところ、『碧巖録』と『無門関』。圧倒的にこれです。しかも、曹洞宗の祖師方が書いた注釈書の方が多い。

**小畑** そうすると、『従容録』はいつ頃から読まれるようになったのでしょうか。

**老師** 一般には江戸時代のはじめに明版が伝わってからです。『碧巖録』などはずっと古い

です。中世に五山版が何度も作られていますから。

**小畑** 『従容録』が曹洞宗のお祖師様、宏智禪師の頌古であり、万松禪師が曹洞宗だったということ、近世の初め頃から重んじられるようになった。

**老師** そうです。逆に臨済宗はまったく関心をもたない。では曹洞宗は『従容録』だけになったかというところ、そうじゃない。『無門関』『碧巖録』も相変わらず勉強している。

**小畑** どちらも百則ですが、宏智の頌古と万松行秀の著語の中に大きく流れている共通の考え、思想はあるのでしょうか。

**老師** 共通の思想とはいえませんが、曹洞宗的なやや静かな禅風が感じられます。『碧巖録』は中国でも広く流行しますが、『無門関』は中国では読まれた形跡がないです。不思議な事です。

**小畑** 『無門関』は由良に興国寺をお開きになった法灯国師がもってこられたわけですね。  
**老師** そうです。法灯国師ですね。

## 構成はきわめて複雑！

**小畑** それから、中身ですが。示衆というものと本則（著語）、評唱、頌古（著語）、評唱という五部形式になっています。これは他の公案集もそうなっていますか。

**老師** そうですね。『碧巖録』の形式を踏襲したんだと思います。『碧巖録』のほうは、「雪竇頌古」というのが基になった。それに対して円悟克勤というすごい禅匠が、示衆のことを垂

示とした違いがありますが、形式は同じです。『碧巖録』のほうが百年くらい古いですから、それが元になっていて、それを万松さんが同じ形式をとりながら、名前をかえて境界を述べるようにしたのが『従容録』です。

**小畑** 従来の『従容録』のテキストなどでは、著語の部分は小さい半分ぐらいの大きさの字で、読み下し文にもなっていないですね。この部分を老師は私達に分かりやすく説明いただいている。万松さんが耶律楚材さんに、ここが肝心だよと言っているわけですね。ところが我々がこれを読んでも分らない。鴻盟社刊のテキストにも読み下し文はない。

**老師** 『従容録』は「宏智頌古」百則を用いて、万松さんがそこへ大幅に付け加えて、万松さん自身の著述になっているのです。ですから著語は非常に大切なものですね。大きい字の部分は宏智さんが選んだものです。「本則」はお祖師様のもの、達磨であったり、南泉さんや六祖のものであったりと、唐代から宋代のお祖師様がえた悟りの機縁や禪の修行にまつて役立つお話を百選んだ、それが本則となった。そこへ宏智さんが「偈頌」（禪的な詩）を一つひとつつけた、それが基です。それを後に、万松さんが一則づつに示衆、「示衆」というのはこの一



則は全体的に何を教えているのかーを自分の立場で述べたもの。それからその本則のひとつひとつのフレーズに対してコメントを短くつけている。そのコメントも万松さんの作で、本則が終わると、評唱。「評唱」というのは、なおかつ本則に対して拈提ねんていというか、説明を加えたものです。

そのあとに宏智のつけた「偈頌」があります。その偈頌にたいして、万松さんがまた一句一句に「著語」をつけているわけです。

**編集部** 非常に複雑な構成ですね。

**小畑** ところが日本で売っている一般的な本では、評唱の部分が抜いてあるわけです。示衆、本則、頌古だけ。万松さんのつけたコメントの説明はほとんどないですね。老師の従容録ではコメントを説明してまとめられている。  
**老師** 『明珠』にはスペースがないですから、最初の示衆と次の本則と著語だけしか扱えないのですよ。評唱以下はとでも扱えない。だけど、本則がうんと短いのがある。二、三行で終わっちゃう。その場合には宏智さんの偈頌を取り上げて、多少紹介が出来る事がある。

### より読みやすい工夫を

**小畑** それと、『明珠』には本則に出てくるお祖師様の道場の写真がある。これがどの本にもないですね。本則にとりあげられた道場が今どうなっているか、この写真によって、うかがえる。これは大変貴重な資料ですね。

**老師** いえいえ。写真は、取り上げたお祖師と関係のあるところへ行つたなかで写真があ

るものだけです。

第一ページの左下にカットが入っていますね。それは何かというと、むかし本則の状況を絵に描いた人がいました。本則のエッセンスを日本人も中国人も描いています。面白そうなものをコピーして、使っているわけです。カットがあるかないかでは違うでしょ。それでちよつと救われますよね。

**小畑** 古い作品なんですね。

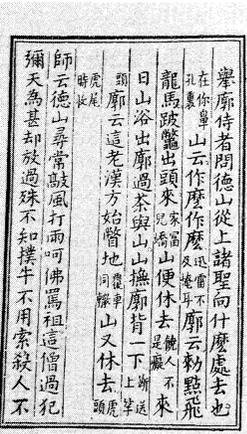
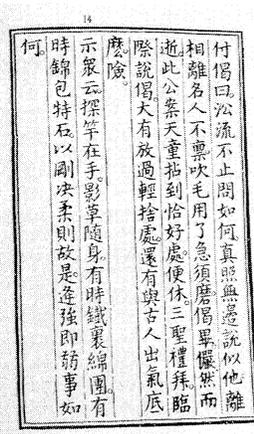
**老師** 中身は読み出しにくいでしょうが、最初の部分が一番大事なところ。元は漢文でそれを読み下しにしていますが、その読み下しの仕方、理解しやすくなるかどうかが決まる。私は最初、伝統的な読み方で文語的に、でも今は、できるだけ意識的読み下しにしています。最近になって、できるだけ分かりやすくと考えて、意識的なルビ（ふりがな）をふるようになっています。それでも難しいですよ。ところで、会員の皆さんはどう読んでいますでしょうか。

**編集部** 私個人としては、この二ページ。内容、分量的にいつでも私は寸劇を見ている感じです。寸劇を観客席で万松さんが解説してくれるというイメージで読んでいます。万松さんが皮肉というか、ひやかしを、そらつ、やつたぞ、とか合の手を入れて、話を盛り上げていく。

**老師** そのとおりですね。

**編集部** それで、文章にリズム感がでてきて、非常にほつとするとところがあります。

**小畑** 著語の部分ですね。



左頁に二列で入っている小さな文字が著語

**老師** そうですね。著語というとなかなか、私はできるだけコメントとしています。面白ところなのに、普通の解説書では著語を取り上げていないのですよ。

**小畑** この文字の小さな部分ですね。『明珠』では（ ）の中の部分。読み下しも何もない。この部分をご老師がどう解説してくれるか期待しています。

**老師** もう残りが少なくなりますからね、厳選して、いいものを探るか、比較的親しみやすいものを選ぶことにします。

『従容録』にも解説書や参考書がありますが、一長一短で、完全なものはありません。

『碧巖録』も岩波文庫から新しいものが出ましたね。東大のインド哲学科の末木先生がキ

ヤップになって出した訳注本が二冊まで出ました。それは相当新しい、つつこんだ深い読みなんですよ。ところがそのような最新の学術的成果でさえも、学者からいろいろな意見が出てくるくらい難しいものなのです。

『従容録』も同じことです。ベストのものは出っこないですよ。なぜかといったら、ルーツの本則をどう理解するかにかかっている。

**小畑** 本則を宏智さんがお選びになったとしても、どういふところから、引いてきたのでしょうか。

**老師** これはもう、宏智禪師の関心というか、悟りの心境からこれかと思うものを選んだのです。ですから、それはみんなすばらしいものです。その中に、またひとつひとつ個性がある。それをどう理解するか。宏智禪師と万松さんの理解とは、少し違うものがあります。道元禪師はまた異なるものもありますしね。いい例が「南泉斬猫」。三者三様に違うわけです。ですからこういう類いは本当に難しいですね。

### 公案をどうとらえるか

**小畑** もとに戻りますが、公案というものを道元禪師はあまり重んじられなかったと言われていますが、また公案集といえは三百則というものもあります。現代において、公案というものをどういふ風に考えたらよいのでしょうか。試験問題というわけじゃないと思われませんが。

**老師** これは現代に限らず、曹洞禪というのは、根本は道元禪師のおっしゃったように、

悟りを目的にするものじゃない。悟りを否定はしないけれども、それは修行の中にあるという立場をとっているわけです。で、公案もそのとおりであって、公案を学ぶのは悟るための手段ではない。しかし、歴代のお祖師様

方が、どういうことで悟ったのか、修行の過程でどういった葛藤があったのか、そういうことを知り、自分の修行の糧にしておくことは必要です。

そのために、何万何千とある公案の中から百を選んだ、これはエッセンスですね。それを集中的に学ぶのは大いに意義がある。

道元禪師ご自身も三百選んだわけですから。曹洞宗だから、黙照禪だからといって、何も退ける必要もなければ、むしろ大いに参究すべきものです。その

証拠に、過去において、中世、近世、近代、現代に至るまで、曹洞宗でも、これは大いに勉強していますし、たぐさんの解説書も先輩が出しているわけですから、一向に差し支えないです。



### 信の仏法、行の仏法

**小畑** いままで掲載されたなかで、特に印象に残ったものは「洞山常切」それと「雲門声色」とかです。「洞山常切」は秦慧玉禪師が最晩年、鴨川永明寺の授戒会にこられまして、「待つていられないんです。」とおっしゃいました。ご自身がいつ死ぬか分からないので、切実だったのです。話の内容とご自身が切っても切れなかったんですね。とても印象深いものでした。

またその時に、「坐禪に功德はなくてもいいですか」と尋ねられて、「功德はなくてもいいのです。だけど、必ずございます」といわれた。

**老師** 含蓄のあるお言葉ですね。  
**小畑** 「功德はなくてもいいんだけど、必ずございます。深く信じてお坐りください」と。  
**老師** わたしも、まったくその通りだと思いますね。

**小畑** 耶律楚材「評唱天童拈古請益後録序」の最後に、「但だ恐れるは、信及ばざれば、徒勞の語」と書いてあります。信じて坐るといふのが大事。功德がなくてもよいが、必ずあるという確信といえますか。

**老師** そうですね。そういう信念、信じるということがないと行が疎かになります。信というのは非常に重要ですね。  
道元禪師の仏法は信の仏法という人もあるくらいです。行の仏法という言い方もありますが、そうじゃない。背後に信があつて、そこに本當の行が具わる。それで行を一所懸命することによって、信がまた新たな深いものになっ



お話を聞いていると、禅匠たちの姿がみえるようだ！

ていく、と。ふつう行か信かと分けて言われていますが、要はどちらも重要ですね。

**小畑** 行が深まると、信が深まるということですね。多くの皆さんが、公案とか、こういうご提唱を今後聞きできる機会があると思いますね。

**老師** そうですね。

**小畑** 毎月の坐禅会は『正法眼蔵』のご提唱、年二回出る『明珠』には『従容録』があるというのには老師にはご苦労でしょうが、バランスがとれていますね。一般の方に、『従容録』をこれだけかみくだいて、二ページに。これなら読んでみようか、と思わせませう。

それと、頌の文の中にとってもいい文句がある。

例えば、洞山常切の中の詩が実にいい。「世に入らず、いまだ縁に循わず。劫壺空処に家伝あり、白蘋風は細かなり秋江の暮、古岸船は帰る一帯の煙」と。読んでいて実に気持ちいい。

**老師** 小畑さんは作詩をされるから、そういいますが、普通一般の者は、漢文というだけでもう難しいという印象を持ちちゃうでしょう。パソコンを始めた初心者が横文字でまいつてしまうのと同じですね。

『従容録』も一般的に有名なものをとってきただけですが、私はできれば五〇則ぐらい、生きていればそれで打ち上げかという思いもあります。

**小畑** 老師の引き出しの中には、『従容録』だけでなく、まだまだたくさんあるので、私たちは安心していきますが。

**老師** とんでもない。お恥ずかしい限りです。**小畑** 板橋禪師が『明珠』をお読みになって、難しいものを、実に分かりやすくてよい、とおっしゃったそうですね。

**老師** 今もお送りしているんです。第三八号の「黄檗嚙糟」なんかは、黄檗さんが怖い人だったでしょ。わたしが自分はやさしいと書いたら、「やさしい人でよかったですね」と感想をいただきました（笑）

**小畑** 偉い方も読んでいらっしやる。

### 何を学ぶかは、その人の力量で

**老師** そうなると、一体何を学ぶかという最終的な問題になるわけですが、それはその人の力量で学ぶしかないと思うんです。これがベストだといえるものは絶対ないと思いますね。その人にとってベストであればよい。

**小畑** ご老師と雲門山へいったとき、『碧巖録』に雲門の則がたくさん出ているのは、どうしてですかと尋ねたら、選んだ雪竇重頤が雲門から四代あとの法孫であったと。言われるほどそうかと思いましたが、一般の人は分からないわけです。雲門の法孫であることが。

**老師** 親しみが違いますね。解釈する人によって、違ってくるのは当然ですが、わたくしは、自分なりに受けとめればいいかと。修養のうで糧になればそれでいいのじゃないかと思えますね。

**編集部** この中で、ご老師が再三言われている事は、日常生活でどう活かすかということですね。

**老師** それは、タイトルが「学ぶ」ということですからね。どう学んでいくか。どう解釈するかまず初めになくはならないですが、単なる解説では面白くないわけですし、参禅会の皆さんに、どう学ぶか一つの指針みたいなものを提示しているに過ぎないのですから。読まれて、いろいろな見方があっていいと思います。また、批評をいただけたらいいんですが……

**編集部** このお話で、『従容録』がより身近になると思います。ありがとうございます。

## 第二回 成道会

平成二五年二月七日



一 二月というのに、境内に暖かい陽がふり注ぐ穏やかな日でした。成道会はお釈迦様の悟りを得た日を讃える行事で、今回は四九名が参加しました。今年も梅花講一二名の皆さんによって成道会和讃が奉詠され、会員配役による法要が粛々と執り行われました。

椎名老師のご法話は、今から三五〇年前にお亡くなりになった鈴木正三の生涯を詳しくご紹介いただきました。

曹洞宗のお坊さんですが、俗名で生涯をおされた方です。戦国時代、三河の国に生まれ育ち、一七歳の時、雪山童子の説話を聞いて、諸行無常という言葉に心打たれます。

関が原の合戦で徳川秀忠の軍に加わり、捨身の心を悟った青年時代。その後、在家のまま各地の寺を巡り、臨濟禪を身につけようとします。大坂冬の陣に従軍し、戦功により將軍直参の旗本に取り立てられます。

その後、江戸にて、曹洞宗の万安禪師について禅を学び、四二歳になって初めて出家しました。

椎名老師は、修行の遍歴のすさまじさや布教、教化の例を幾つかあげられましたが、わけでも六四歳の正三が親族と共に、キリシタン弾圧によって疲弊した天草の村々を、救済したお話は胸を打つものがありました。

老師は鈴木正三の禅の特徴を幾つかあげ、一、必死の禅道を説き、生涯修行に徹した。

二、どんな階層の人にも分かりやすい利他行を実践し、宗派的色彩が薄い。

三、封建的な身分制度に対して批判するなど、批判的精神が旺盛。



「南無天満大自在神」の掛軸

四、個性を遺憾なく発揮した一匹狼的宗教者であった。

そこから、老師は宗教者の原点に触れ、慈悲心のあるなれで違いが出ると言われた。そして、慈悲は人からいただくものでなく、修行、実践する過程に具わってくる。今こうして坐禅ができるのも、家族の深い思いやりや支えがあるからで、それには慈悲の心で報いなくてはならない、と結ばれました。

めったに見ることのできない正三の直筆をご披露され、力強い筆勢に鈴木正三という人の人柄を思わせるものがありました。

法話の後で、昭和五八年から二〇年参禅された会員四名に、精進を讃えて額装された椎名老師の揮毫が贈られました。

梅花講の皆さんと共に点心を頂き、茶話会では皆さんが感想をお話されました。

三町さんからは、額入りの石仏の写真がくじ引きで六人に贈られたほか、たくさんの方からお菓子や果物など添葉を頂戴しました。皆様のお陰で二一回目の成道会は大円成いたしました。感謝申し上げます。

# 祝・参禅二〇年

## 「是れ何ぞ」

松戸市 徳山 浩

昨年二月七日、第二回成道会の際、椎名御老師から参禅二〇年記念の大幅を頂戴いたしました。三町さん、高野さん、中寫さんの四名でした。皆様、私同様第一回の成道会が行われた昭和五八年に、龍泉院参禅会に入門された道友です。

## 「是什麼」

讚 徳山浩居士之参禅廿年

平成十五年佛成道之令辰

龍泉三十一世大心宏雄叟

表装は、同じく道友の武田さんが精魂を込めて完成された見事な出来栄えの大幅です。

後で御老師から伺ったのですが、正式な読みは「是什麼」であり、意味は「是れ何ぞ」これはなんですかということだそうです。

我々凡夫には、一生対峙しても解けそうもありませんが、なんとも魅力的な響きのある言葉ではありませんか。一日に何度か拝見しておりますが、御老師の草書からは、その都度新たな感動を覚え、そして勇気を頂いているような気が

がいたします。本当に有難いことと感謝いたしております。

平成九年三月から約半年間、正法眼蔵「恁麼」の巻のご提唱を拝聴いたしました。「什麼」も書きますがいろいろのことを教わりました。そして巻末のところで有名な言葉が出て参ります。

「是什麼物恁麼來」

曹谿山大鑑禪師（六祖慧能）のもとに南嶽大慧禪師が初めて来られた時に、大鑑禪師が云った言葉です。「なにものがなににきたのか」という意味です。

平成八年十一月に龍泉院参禅会発足二五周年記念講演会「禅を聞く会」が柏市長全寺で催されました。板橋興宗老師と奈良康明先生（元駒澤大学学長）が講師で大反響のあった会でしたが、奈良先生のテーマは「私って何でしょう」というものでした。極めて格調の高



い禅についてのお話を先生独特の明快な口調で話されたことが今でも印象に残っております。

今年には龍泉院参禅会も三三年目を迎え、歴史ある会として発展の年となりました。私もこれから毎日「是什麼」の書と対峙できる幸せをかみしめ、勇気を頂きながら「是什麼」そのものを求め参禅に励んで参りたいと念願しております。どうかよろしくご指導下さいますようお願いいたします。

合掌

## 坐つて二〇年

我孫子市 三町 勲

今回、御老師から参禅会入会二〇周年を期に、記念品を戴きました。それは大変立派な御老師直筆の書額で、「没蹤跡」と力強い筆致です。感動と感謝のうちに参禅二〇年が駆け抜けて行ったようです。

未だ二〇年、もう二〇年と言う二つの言葉が私の頭の中を駆け巡りました。会員の去来は参禅会の歴史の長さを感じさせます。特に、彼岸に旅立たれた方々の風貌は、逆光の中に映る石仏のように、見えるようで見えない崇高な面影として心に刻み込まれています。

また、第一線を退かれて、次の新しい人生に一念発起された方々

は、趣味にせよ仕事にせよ、限られた人生を、自分の生き様を硬い石に刻み込む頑強な姿に見えます。新たに禅の道を探求するために入会された方々は、この先の未来像を心に描き、目を輝かせて勇猛邁進して居られる力強い姿に見えます。何れにせよ、道元禪師の切開いた禅の道を究める菩提心は一つです。

一方、私の修行の浅さは、誠に時間の短さを痛感させるのです。年中行事の一泊参禅会（今は一夜接心）や成道会の際に渡される参禅要典を手に、皆さんの經典の崇高な唱和に同調出来ないのです。ひと時、自動車のカセットプレーヤーに般若心経のテープを仕込んで、運転の時間を利用し暗誦しようとしたが、無駄でした。つまり、お経はカラオケではなかったのです。

私の母は目が不自由でした。しかし、お経はほとんど諳んじていて、法事の時などお坊さんのお経に唱和していました。信仰心の深さの違いなのでしょう。年月は重ねていても、諸先輩のように行事施行のお手伝いも出来ない無能ぶりです。

参禅会で何か自分に相応しい役割はないだろうか。こんな事を考

える日々が過ぎる中に、偶然、写真との出会いがありました。たまたま、私の写真の師匠が石仏写真の大家でしたので、その奥の深さに魅せられてしまいました。毎年の成道会に皆さんに差し上げていく石仏写真は、一年の成果なのです。石仏の写真喜んで戴いて下さるのは参禅会の皆さんだけだと思います、毎年気持ち奮い立たせて撮ったものです。

こんな未熟な私を育み、叱咤激励下さる方々は、御老師をはじめ道友の皆さまです。今後とも皆様のご指導、ご鞭撻をお願いすると共に、皆様のご壮健をお祈りします。



## 今、二〇〇年を想って

柏市 高野千代子

思いもかけず、昨年成道会におきまして、参禅二〇〇年ということでお師より、讃を頂きました。その中味を思います時、誠に面映ゆく、唯、唯、時の流れに乗せて

頂いた二〇〇年であったように思われ、有難い思いと同時に、何か背中にピシッと警策を頂いた思いがございました。

振り返りますれば、私がお寺にご縁を頂きましたのは、長年の仕事を終えてから間もなくのことです。仕事を休んで、庭の開放され、道に歩けば、人様のお庭の花の美しさに感動し、花はこんなにも美しく咲いていたのだと、気付かせて頂きました。仕事の事しか頭になかった私は、花を見てもその美しさに感動することさえなかったのです。唯、唯、前だけ向いて勤め上げた歳月であったように思われます。

退職後、ホッと一息ついておりました時、思いもかけないご縁から、故高間様、小畑代表幹事様等のご縁を頂きまして、お寺に繋りました。当時の私は、私の為にだけ後押しして支えてくれた両親を、次々と亡くし、一人息子も結婚して家を出ました。見渡せば一人ぼっちの私でした。人間は、弱く、脆いもので、一人を生きることに空しさを、思い切り味わいました。夢中で走っておりましたルール、唯、唯、仕事の為、家族の為に生きたルールは無くなっていました。生きることに不器用な私の、放心

状態の中で頂いたお寺とのご縁でした。

月一回の参禅会は、私に少しづつ、少しずつ、「生きることは」という宿題に答を頂いたように思っております。坐禅の後、熱く語られる御老師のご提唱は、私の大切な宝となりました。

今、二〇〇年を思います時、仏様の御手の上に乗せて頂いたご縁のように思われます。人間は色々なご縁で、その運命を変えてまいります。日々の世相を見ます時、どんなご縁を頂けるかによって、人の幸、不幸が分かれるように思われます。私は、今この二〇〇年のご縁にすがりながら「あるがままに生きよう」と心に誓っております。ありがとうございます。



## 上山二〇〇年「是什麼」と『正法眼蔵』提唱

流山市 中島 宏誠

今年参禅会発足三三年、成道会は二一回となる。

今回、上山二〇〇年ということで、計らずも椎名老師から自筆「是什麼」の額を頂き、感激しています。幼い頃に過ごした中国北京で耳にした「シエマ」(何)を思い出しました。

上山は昭和五八年、当時可睡齋の後東堂をなされていた中野東禅老師の著書で龍泉院を知った。

この二〇〇年は人生後半のせい、参禅のリズムなのか、過去の数倍の速さで過ぎ去った。

これからの人生は「是什麼」を模索し、成道会の問答で椎名老師に問うた「看脚下」を基に生きていきたい。

上山した昭和五八年一月、椎名老師の『正法眼蔵』提唱は

「仏性」の巻であった。  
一切衆生悉有仏性如来常住有無變易

それ以後の提唱と眼目をあげると「一類明珠」六〇年四月、  
尽十方世界これ一類の明珠なり  
「坐禅箴」六〇年十二月、  
初心坐禅は最初の坐禅なり、最

初の坐禪は最初の坐仏なり

「山水経」六二年二月、  
而今の山水は古仏の道現成なり、  
ともに法位に住して究尽の功德を  
成せり

「心不可得」六三年三月、  
過去心不可得、現在心不可得、未  
来心不可得

「發菩提心」六三年八月、  
菩提心をおこして後、かたく守護  
し退転なかるべし

感應道交するところに發菩提心す  
るなり

「身心学道」平成元年七月、  
ただ正に時節とともに發菩提心す  
るなり

地獄、餓鬼、畜生、修羅等の中に  
しても發菩提心するなり

「有時」平成二年五月、  
有時意倒句不倒、有事句倒意不倒、  
有事意句兩俱倒、有事意句俱不倒、  
意句ともに有事なり

「菩提薩埵四攝法」二年一二月、  
一布施、二愛語、三利行、四同時

「観音」三年七月、  
観音はわずかに千手眼なり、十二  
面なり、三十三身、八萬四千なり、  
雲巖道悟の観音は許多手眼なり

「諸悪莫作」四年一月、  
諸悪莫作と聞こえるこれ仏正法な  
り

自己は有にあらざ無にあらざ莫作

なり

「古仏心」四年九月、  
古仏心は牆壁瓦礫なり  
世界は十方みな仏世界なり、非仏  
世界いまだあらざるなり

「即心是仏」五年一月、  
たとえ一刹那に発心修証するも即  
心是仏なり

「無情說法」五年七月、  
正伝の面授あらざるを正師にあら  
ずという、仏正伝しきたれるは、  
正師なり

「古鏡」六年七月、  
諸仏諸祖の受持し単伝するは古鏡  
なり、同見同面なり同像同鑄なり  
同参同証す

「坐禅儀」八年一月、  
坐禅は習禅にあらず、大安楽の法  
門なり、不染汚の修証なり

「谿声山色」八年四月、  
はじめて仏道を欣求せしときのこ  
ころざしをわすれざるべし

正修行のとき溪声溪色、山色山声、  
ともに八万四千偈をおしまざるな  
り

「恁麼」九年三月、  
古仏として古仏の道を聞著せんと  
き、向上の聞著あるべし

十方仏土中、唯一乘法なり  
「発無上心」九年一月、  
一発心は千億の発心なり

坐禅弁道これ發菩提心なり



「見仏」一〇年七月、  
見釈迦牟尼仏、成釈迦牟尼仏する  
を成道作仏というなり

「三時業」一一年五月、  
業報をあきらめず三世をしらず、  
善悪をわかまざる邪見のともが  
らに群すべからず

「唯仏与仏」一一年一〇月、  
仏の行は尽大地と同じく行い尽衆  
生ともに行なう

「三界唯心」一二年四月、  
発心修行菩提涅槃ならしむ、これ  
すなわち皆是我有なり

「説心説性」一二年八月、  
たとえば萬里を行くものの、一步  
も千里のうちなり、千歩も千里の  
うちなり、初一步と千歩とことな  
れども千里の同じきがごとし

仏性というは一切の説なり、無仏  
性というは一切の説なり

「行持」一三年一月、  
尽十方界は真実道なるがゆえにし  
かあり、尽十方界なるがゆえにし  
かあり

仏仏嫡嫡相伝する正法眼蔵ひとり  
祖師のみなり

参禅は身心脱落なり、焼香、礼拝、  
念仏、修懺、看經を用いず、祇管  
に坐して始めてよし

しずかにおもうべし、一生いくば  
くにあらず、仏祖の語句たとひ三  
三両両なりとも道得せんは、仏祖  
を道得せるならん。ゆえはいかん。

仏祖は身心如一なるがゆえに、一  
句両句みな仏祖のあたたかなる身  
心なり。かの身心きたりてわが身  
心を道得す

今年、一二月に「行持」(上・下  
巻)を丸三年かけて終えた。

平成一五年六月の一夜接心では  
「重雲堂式」を拜読し、『正法眼蔵』  
提唱は二六巻となった。

改めて椎名老師の情熱あるご指導  
に心中より御礼申し上げます。

因みに、私が上山する前の提唱は  
「辨道話」昭和五四年

「現成公案」五六年三月、  
「生死」五七年一月、

「道心」五七年六月、  
と合わせて三〇巻の提唱を終えた。

完読するまでにあと何年かかるか  
椎名老師に訊ねたところ、二〇年  
位かなとおっしゃっていました。

長生きしなければ！ 合掌

縁に感謝する(下)

沼南町 永野 昭治  
後夜坐禅。暁天坐禅と同じで、

夜を初夜、中夜、後夜に三分し、最後の部分を後夜というところ。洗足、冷たい。夜のしじまに浴け入るようになって、外堂の自単の牀に止静する。内堂に修行僧の気配はあるが、入口は簾に閉ざされて窺うことができない。ご老師の醒覚、策励の警策が堂内の空気を震わせる。坐禅は我慢競べにあらず。ご老師のお言葉です。随時宥るされていた経行には相当すくわれることになった。

朝課。朝の勤行で、祇園正儀、他の読経が続きます。

提唱。主題は「典座教訓」。他寺院から招聘されたご住職によって三日間の講説がなされた。典座の仕事は雑念を交えず、修行僧に最良の食事を提供する努力が、坐禅の修行に通じる意義がある。典座の仕事の実際、調理の精神、典座の自覚等についての説示でありましたが、学習の至らざることに、密かに恥じるのみであった。

現代は飽食の時代といわれて久しい。母親の料理に費やす時間が年々減少の傾向にあり、調理済み食品が大量に流通して、そのまま食卓に提供されたり、自分の個室でテレビを見ながら一人で食事をすする子供達もいると聞く。食事を作る人は食べる人の気持ちを思い、

食べる人は作った人への感謝と、一緒に食べている人への心配りをするという行為が毎日繰り返されることになって、人と人とがどう係わり合っていくかを習うのであると思う。幼少期の味気ない食事体験は、釣り合いのとれた身心の育成に悪影響を及ぼすことは避けられないことだろう。

口宣。坐禅中、幾たびかご老師の説教があった。「念起是病、断惑是薬、一切の業障はみな妄想、妄念より生じる。人間の脳細胞にごまかされるな。日常の生活のど真中に仏法がある。粉骨碎身坐禅せよ」「法喜禅悦、而今が極楽浄土で



平成13年、北陸祖跡参拝時、宝慶寺において

ある。他に極楽浄土などない。」「この現実の世界をどう生きるか、迷いのまま生きれば凡夫の世界、気づいて生きれば仏の世界である。」ドイツの詩人カール・ブッセの詩、「山のあなた」を思いだした。幸せを求められない苦しさをうた求めても得られない苦しさをうたっています。幸せは足もとにあると気づかせようとしているように思われます。

受食。粥・齋は僧堂行鉢、薬石は庫院で戴いた。我が儘な態度で食べてはいけない。礼儀正しく食べなさい。傲慢な態度をとるようならば、それは、思慮分別をわきまえない子供や、淫らな人である。

テレビで大喰い競争なる番組が放送されていた。一方では世界で八億四千万人もが栄養不足に苦しんでいると伝えている。その人々を救済しようと力を尽くしている人達がいる。日本は本当に良識の乱れた、心の貧しい似非自由主義の国になっていくのだろうか。お釈迦様は、「恭敬して、食を受けよ」と説かれている。

行茶。喫茶と、添菜を戴きながら一日の予定の確認と、ご老師からのご指示のある一時である。一日の中で全員が顔を合わせる機会、この行茶と薬石の時だけであ

る。あるとき、修行僧達の表情がとでも穏やかなことに気づいた。雪を踏みしめての托鉢修行、篤い病いに罹るときもありませぬ。悪魔の囁きもあるに違いない。それなのに難行苦行に耐えている雰囲気は微塵も感じられないのです。きつと僧達にとつて修行とは苦行ではなく、俗の推測の及ばぬ垣内（かきい）にあって、安業の行なひのかもしれない。

作務。法堂の掃除、東司の清掃、墓地に堆積した枯れ枝や落ち葉の除去、苔むしている墓石や供養塔の清掃、庭場の除草、一日三回の勤労は、修行と見なされ、髻のごとく、唾のごとく黙然としてひたすら汗を流すのであった。

円成の日。開山堂に安置されている寂円禪師、義雲禪師、曇希禪師の御霊に五体投地の礼拝を済ませて、法堂に一同参集、ご老師より大道会撰心円満成就のお言葉をいただいた。

己事究明の試みは、我執から離れられず、我欲を捨てられず、見事に碎かれてもとの儘である。「無所得、無所悟にして端坐して時を移さば即ち祖道なるべし」椎名御老師の口宣です。坐禅はなせするのか、無所得、無所悟の坐禅をすること自体が目的なのです。忘れ

きです。

齋は冷や麦に精進揚げが添えられている。撰心円成を讀んで特別に馳走された心遣いに合掌して戴く。和やかな顔、顔、顔、心底嬉しうである。私もまたその中の一人であった。

趣向はさらに続いた。境内の一隅に数々の寺宝を収蔵している宝物館がある。その館の前庭に人の背丈よりも少し高い桃の木が一本満開の花をつけて陽に映えている。花を背にして一〇畳ほどの蒼い毛氈に野点の席が設えられていて談笑が楽しうである。案内されて相伴を受けることとなった。温かく、心の底からのもてなしに、深く感謝申し上げます。

「道中気をつけてゆけよ！」御老師は仰って下さった。お暇ごいをして帰路につく。「道中気をつけて」のお言葉は、六塵の世界で昏惑して生きている己れに気づいてゆけよ、というお示しであることに気づくのは相当後のことであつた。

## 梵魚寺を訪ねて

柏市 安本小太郎

正月、北九州市に赴任している次男の処に滞在した機会に、釜山まで足を伸ばすことにした。

一月六日、博多港からホバークラフトに乗り、三時間足らずで釜山港へ着いた。一泊二日、一万七千円は安い。昨年の成道会で釜山に行けるかも知れないと思つたので、椎名老師に梵魚寺をお聞きしておいた。

一月七日、妻が目覚めるまでに帰る予定で、にぎり飯をリュックに入れて朝四時半に部屋を出る。前日にホテル近くの地下鉄ソミョン(西面)駅で乗車し、終点駅から歩いて行くと聞いていた。

始発が五時半なので、地下鉄の通っている道路を歩いて、途中駅で乗車すればよいと考え、暗い道を歩き出す。この時期の釜山は柏より一時間半は夜明けが遅い。意外と暖かい。

三〇分以上歩いて地下鉄の入口らしいものが無いので、不安になり色々な人に確認したが、その様子を一つ書きます。

ウォーキング中の五〇代と思われる三人の女性に地下鉄の駅を尋ねる。口々に捲くし立てるが、韓国語は全く判らない。略図を見せて梵魚寺と言っても通じない。そのうち耳の大きな女性が携帯電話を取り出して、何処かにかけていたが、私に渡して話せと示す。受け取ると日本語の話せる人がでて

いて、駅までは歩くと三〇分以上は掛かるとのこと、釜山の地下鉄駅は何と間隔が長いのかと思う。礼を言つて持主に返す。携帯を切つた後、二人が私の来た方向を指して、バスで駅まで行くと百ウォン硬貨枚数をくれようとする。一番大人しい人は千ウォン紙幣を出す。押し問答?の末やつと断る。

三人に、礼を云うと、ウォーキングに戻つて坂を登つて行く。故鎌田茂雄先生の文章に韓国人の親切さは仏教から来ている、とあつたが、日本人ならここまではやらないと思う。旅の醍醐味、心が暖かくなった。

結局バスでソミョンまで戻り、地下鉄に乗り、終点一つ前の梵魚寺駅で下車した。そこから寺へは二車線の舗装された登り道を行く。両側は大きくないが松、くぬぎ、檜、しで等の雑木林で桜並木の所もあり清浄の気が漂う。三キロ弱を四〇分歩くと、梵魚寺極楽殿の標示が見えた。

自然石の石段を登つて堂に行く。自由の上れそうなので、靴を脱いで上る。六〇代の女性が一人礼拝を始める。又奥では、七〇代位の男性が看経している、こちらは相当長時間行っている様子だ。入口に縦一、五メートル、横六

〇センチ、厚さ五センチほどの薄紫の座蒲団が積んであつたので、一枚とつて一五分位坐禅し、般若心経一卷を誦す。彼の男性が終つて礼拝を始めた。我々がやっている曹洞宗の五体投地である。

堂を出て、広場から道に下る階段に腰掛けて、にぎり飯の朝食をとる。相当な高台なので眺望が良い。犬が寄つてくる、近くのカラ松らしい木に鶺鴒が飛来する。食べ終わり、来た道に出る。途中、看経していた男性が青い車で帰るところで、眼鏡をかけた顔は厳かだ。修行の後は皆こうなるのだろうか。

終点駅までは絶好の散策コースだと聞いていたので、来た道と反対に坂を登つて行く。二人連れで歩いて来る人、ジョギングする人、対向車、追い越す車の往来する道を歩くこと三〇分位で、門前の店らしい家が現れて、道が下り坂になる。右手に梵魚寺の入口がある、前のは寺の一部であつたのだ。車用の路を登つて行くと左手下に参拝受付所があり、三〇才位で作務衣姿の小柄な僧がいて、千ウォンという。払つてチケットをもらう。

金井山梵魚寺(ホモサ)、曹溪宗。新羅、文武王一八年(西暦六七八年)、義湘大師により創建される。

義湘は海東華嚴の初祖、朝鮮華嚴を開いた人で、朝鮮仏教史上に重要な役割を果たし『華嚴一乘法界図』等の著書を残した。(鎌田茂雄著「朝鮮仏教史」による)。

左に岩を濡らす川をみて、登ること五分程で曹溪門を潜る。右に色々な石碑が並び、左に大は直径二メートル以上、角が取れた白っぽい岩石の間を清流が下る。舗装された路を四〇メートル登ると、山の斜面に各種の伽藍が並んでいる。

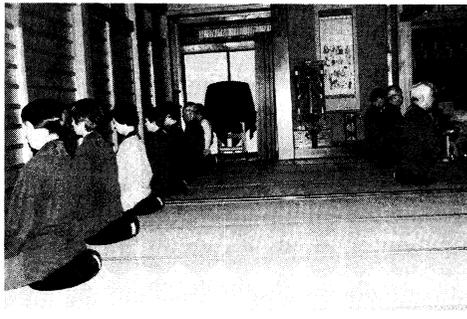
本堂は修復中で、三階の足場を組んで、一〇名位の女性労働者が直径五〇センチ位の竹で編んだ盆に練った土を入れて運び上げ、男性は上で工事をしている。本堂左下に僧伽大学がある。左側の諸堂を廻った

羅漢堂では、男性が一人坐禅をしている。悪いとは思ったが写真撮らせてもらった。二〇年位前に椎名老師にお聞きして、ソウルの曹溪寺を訪ねたが、一〇人以上の人が礼拝を繰り返していた。韓国は寺を訪れて仏道を行ずる人が居るのを感じる。さすがに梵魚寺は観光目的の人が圧倒的だった。各堂の間の通路はたたきの様に堅い土で足にやさしい。

東司で僧伽大学の方から来た東

アジア人らしい作務衣の僧に会う。しばらく行くと、瓦志納をしていった。一万ウォン(九五〇円)なので、見本に倣って、一枚に日本国、千葉県、安本小太郎と白ペンキで書いた。

帰りは、駅まで歩こうと思ったが、大分時間も過ぎていたので、バスに乗り、梵魚寺駅から地下鉄にした。ホテルには一〇時半に着いた。往きは暗くて苦勞したが、



帰りは明るく楽であった。最初から地下鉄で行っていれば、一時間以上無駄にせずに済んだが、言葉が判らず、字も読めず、暗くて知らない道を歩いて色々な人に道を尋ねた。釜山の暖かい人情に接したり、自分の中に種々の煩惱を観

ることが出来たりで、有意義な六時間の体験となった。

## 起き上がり小法師に学ぶ

我孫子市 清水 秀男

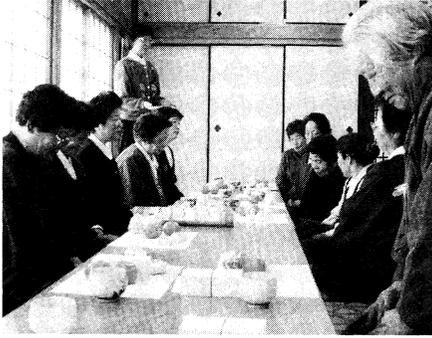
会津の正月の、縁起物の一つに、起き上がり小法師(縁起達磨)があります。起き上がり小法師は、面壁九年で有名な達磨大師にちなみ、倒しても倒しても起き上がる不撓不屈、忍耐強さ、七転八起の精神を表すと共に、達磨大師のまろやかな心、穏やかで円満な悟りの境地を象徴していると言われていいます。会津の人は、正月の初市で家族の数より必ず一つ多く買う。これは家族とお金が増える様にといい庶民の願いの現れと言われています。

起き上がり小法師にちなみ、私の敬慕する愛知専門特別尼僧堂長青山俊董老師がお好きな、「投げられたところで起きる小法師かな」という古歌があります。起き上がり小法師は、たとえどんな所に投げられても必ず起き上がる。人間も、人生において、病氣・事故等色々な苦しみや苦勞にぶつかると、この小法師の様にそれから逃げることなく、しっかり正面から受けとめて前向きに取り組んで生きてゆこうと、この

歌は教えていると思います。私は昨年六〇歳の還暦を迎え、今までの来し方を見た場合、この起き上がり小法師の様な生き方をして来ただろうか、全く慙愧の念に堪えない次第です。

病氣、事故、災害、経済的問題、仕事上の不首尾、出向、昇進、身内の不幸、人からの裏切り等々いろいろな事があつたと思います。その時、その現実から逃避したり、人を羨み、何故自分だけがこんな不幸なめに遇うのかと愚図り、腹を立て、人に責任を転嫁し、周囲を非難し、いがみあい、人を傷つけ、迷惑を掛け、失望し、自暴自棄になるといって繰り返してはなかつたらうか。

一方それに引き換え、得意絶頂の時、多くの人々の援助・お蔭によって現在の自分があるにも拘らず、すべて自分の実力でなし得たんだ、自分の功績だ、自分が一番偉いんだと過信し、人を人とも思わない高慢ちきな態度・行動に出るといって事が多々あつたのではなからうか。まさに冷汗一斗です。それに対し、起き上がり小法師の行動はどうであらうか。どんな所に、どんな風に投げられても、回りの環境を厭う事も無く見事に起き上がり、何事も無い



梅花講の皆さんと…成道会、茶話会

かの様に大地に坐り込んでいます。今居る所がいつも最高の場所であり、安息の場所であるとも言いたげな風情です。

この起き上がり小法師の行動は、良寛さんが越後の大地震時、知人への書信の中で認められている、「災難に逢時節には、災難に逢がよく候。死ぬ時節には、死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるる妙法にて候」に通ずると思います。私達はこの起き上がり小法師に初心に帰って学ぶ必要があるのではないのでしょうか。

それは、どんな苦難・不幸が飛び込んできても逃げることなく、泰然自若として、がっちりを受けとめ、むしろそれらをチャンスとして積極的に腰を据えて取り組ん

でいく。そしてそれら苦難・不幸への真摯な取り組みを通じて、初めて、本当の自分に目覚めることができ、そこでそのまま救われていることに気づくことができるのではないのでしょうか。

余語翠巖老師は次の様に述べておられます

「どんなことも、幸い」とちようだいできたとき、すでに成仏しているのです。苦難に遭遇したことも「幸いに」と受けとめることができたとき、すでに苦難から脱けて出ているのです」

一方、幸運にも自分の希望通り順調に推移している時も慢心することなく「反省」と「感謝」を持って一瞬一瞬を大切にして、日々の暮らしをする。

青山老師は道元禪師の御歌

「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて冷しかりけり」

を次の様に評されています。「人生の春夏秋冬を追わず逃げず、すべてよしと受けとめてゆけというのである。…われわれは、つねにわが心にかなうことを追っかけ、思うようになると酔っぱらい、のほせあがり、わが心になわなないことに会うと逃げたり愚痴ったりおちこんだりする。人生の吉凶禍福を、揀択なく、えり食いなく、

同じ姿勢で受けとめ、むしろ積極的にようこそと受けとめ、一つ一つを大切に、一歩一歩それ自身を目的として勤めあげてゆけとのお示しなのである」

投げられた所で、今の一步を目的としてキョロキョロすることなく、姿勢を正して生きてゆくこと。この姿が坐禅であり、起き上がり小法師の姿だと思えます。そしてその姿が身心共一番安定した姿であるが故に、投げられたところがたとえ泥まみれの軟弱な場所であったとしても、そこにどっかと腰を据え、そこを起点として再び起き上がることはできるのではないのでしょうか。

そしてもう一つ留意すべきことは、世間という勝利なり敗北は、人生における勝利なり敗北ではないということ。世間における勝ち負けは、世間の評価基準（財産、社会的地位、名誉、学歴、出身等々）における勝ち負けに過ぎません。人生における勝ち負けは、仏様の評価基準（仏教の教えを体得し、実践する）における勝ち負けです。世間の評価に一喜一憂するのではなく、仏様の評価にかなう生き方を心掛け、それになつていくかどうかで人間の価値が決まってゆくと思えます。しかもその

価値は、棺桶の蓋を覆う時、最終的に決まるのではないのでしょうか。臨済宗東福寺派管長の福島慶道老師は言っておられます。「精一杯生をきた者が、死に直面して精一杯死んでゆける」と。

私の還暦以降の人生は、仏様の評価基準にかなう様、また起き上がり小法師の行動を自分のものにするべく新しい出発をし、社会に少しでもお返しができる様、精進・修行して参りたいと思っています。

そして、人生の最後の瞬間において、「皆様のお蔭で素晴らしい人生を過ごさせて頂きました。有り難うございました」と合掌・感謝しながら生を全うできるようにしたいものだと思う今日この頃です。

最後に今から四〇年前、私の学生時代、禅への眼を開いて頂いた神戸の臨済宗祥龍寺、当時ご住職の菅宗信和尚が、相見時にいつも我々学生に言っておられたお言葉をご紹介します。

「どうされようとも

こうされようとも

何ともない自分を磨け」

どんな所に、どんな風に投げられようとも、主体性を失わずに起き上がる小法師の、不撓不屈の基本的スピリットを現していると、あらためて感じ入っています。

# 今年の夢

柏市 五十嵐嗣郎

「明珠」編集長の今泉さんに何か書くよう命ぜられたのを機会に、「明珠」を読み返してみると、三四号と三六号が欠落していることに気が付いた。毎号ファイルしているつもりだが、どこかに置き忘れて失くしてしまっている。そのような不心得者もあろうかと、平成一年に第一号から三〇号までを合冊してくださったご老師や編集委員の方々のご尽力と、故政安さんの奥様からのご浄財に、改めて感謝する次第です。

先のことになりましたが、三十一号から六〇号まで合冊する時には、私も何らかのお手伝いをさせていただきたいと思っています。(その頃は私も七〇才になり、足手まといになるかもしれません)。

気の向くまま「明珠」を見ていくと、故人となられた方々の文章や写真を懐かしく拝見することができ、あの世からしつかり坐れよと声を掛けられたような気がします。

また、小畑さんや高野さんなど古参の方々も、二〇年前の写真を見ると実に若々しくお美しいのに気づきます。

さらに、ご老師が毎回書かれている「従容録に学ぶ」を改めて読み直すと、難解な公案を日常の生活の中に取り入れて、その意味を懇切に解説され、実に温かく我々をご指導されていることに、深く感銘させられます。

「従容録に学ぶ」の中には、中国江西省に所縁のあるお祖師様方がしばしば登場しますが(青原行思、百丈懷海、洞山良价、曹山本寂など)、昨年九月にこれらのお祖師様方の祖跡を巡拝する予定でしたが、SARSの影響でやむなく中止となりました。今年SARSの拡がりが無ければ是非実現したいと思っています。私も今年で定年を迎えますが、第二の人生の最初のご奉仕として、中国江西省への旅をお世話させていただければと思っています。

第二の人生では時間がいくらでもありませんから、この他にも参禅会のお世話をどんどんやらして頂くかと思っっていますが、果たしてお声をかけていただけものか、はなはだ疑問です。ただ、私の会社の行動規範の第一則に「仕事は自ら創るべきで、与えられるべきではない」とありますので、恐れ多くも大隠を勤められればとひそかに思っている次第です。

# 追悼

## 加藤和子さんを悼む

埼玉大井町 石田 七重

好みしとふ瀬戸の花嫁流るるを葬の席に涙して聞く  
お二人の凜々しきご子息の面差しは母なる君にこんなにも似て過ぎし日のバス旅行での合席に心開きて語りしものを  
一枚の写真に共に映りたる君の微笑み永久に忘れじ

白菊の清く悲しき香を持ちて君の柩にこゑかけ別る  
年賀状に書き添へられたる文章を  
読み返しつつ虚しさ募る  
端坐して唯ひたすらに心経を書き  
居り君を送りしあとを



ありし日の加藤和子さん(左端)

和子さんとゆつくり親しく会話を交しましたのは、龍泉院参禅会三〇周年記念行事の一つとしての、平成一三年六月二九日から七月一日までの、三日間の「北陸地方祖蹟参拝研修」の旅でした。

バスでのかなりの距離の移動の時間のほとんどを、和子さんと共にしました。しばらくは窓外に移りゆく風景を楽しんだり、これから先の予定への不安などを語り合っていました。いつしかどちらからともなく、大安心の中でお互いの心の裡のこと盡きることなく語り合っていました。

旧知の友人でもなく、龍泉院参禅会で数える程しかお会いしていないのに、後日この日のことを和子さんはお便りの中で、「心全開で接することが出来ました。」と書いて下さっていますが、実は私こそこの言葉をそっくりそのままお伝えする心算でした。

人とのご縁とは誠に仏様とのご縁です。信仰心深い和子さんは、ご老師のお教え通り、死んでも修行と彼の地で修行に励まれているのでしうか。貴女の笑顔を胸に精進を重ねてゆきたく存じます。

さようなら 合掌

# 新年の会

恒例となりました新年の会が、今年も二月八日(日)「柏・木曾路」に於いて、御老師をはじめ有志の方々が集い、賑やかに行われました。

この時ばかりは、周囲の様子が禅堂とは一変していることもあり、またお料理とお酒で口調もなめらかになり：：時には、はじめて聞く、嬉しいやら、おかしいやら、

驚きやらの話が續出、各自の持ち時間がアツという間に過ぎてしまいました。

しかし、道を求めて集う私達、そんな笑いの中にも、確かに仏心が見え隠れしております。毎日の規則正しい生活を力説する人・お遍路に心はずませる人、第二の人生の中に、何か自分の出来る事を見つげようとする人等々、そして御老師に「その行為こそ居士說法というものですよ」といわれる人まで、笑い三昧の新年の会も、立派な修行の一日でした。

## 龍泉院参禅会簡介

- 一、日時 毎月第四日曜九時より(初参加の方は八時半までに来山のこと) 四月は八時半より坐禅作法指導
- 一、坐禅 第一炷 口宣、坐禅三〇分  
第二炷 一〇分  
第三炷 坐禅三〇分
- 一、講義 木版三通、開経偈を唱え、椎名宏雄老師より『正法眼蔵』の提唱を聞く。一月より「諸悪莫作」の巻
- 一、座談 自己紹介の後、茶を喫し座談。正午解散
- 一、参加資格 年齢、性別を問わず、どなたでも参加できます
- 一、会費 無料
- 一、成道会坐禅 月例参禅会の外に、毎年一二月の第一あるいは第二日曜(本年は二月五日) 釈尊成道を讀え坐禅、成道会法要後、法話を聴聞、点心を共にする
- 一、一夜接心 六月五・六日、七炷の坐禅をし、ご提唱を聞く

## 沼南雜記

参禅会記録( )内は座談の司会者

平成一五年

●一〇月二六日 二八名 (久光 守之氏)

●一月二三日 三二名 (武田 博志氏)

●二月 七日 四九名 (内、梅花講員 一二名)

第二一回成道会

幹事 (中寫 宏誠氏)

●一二月二八日 三〇名 (永野 昭治氏)

●一二月二八日 三〇名 (大坂 昌宏氏)

●一月二五日 二八名 (宮本 茂氏)

●二月 八日 一九名 (富澤 勇氏)

●二月二二日 三五名 (戸塚 英明氏)

るのではないかと錯覚、歴史は息している。

▼梅が早々に咲いた今年の春、古代、爽やかな空に梅香は優しく、人々に春を告げていたことでしょう。探梅、暗香、こんな言葉を思い出し、今の春を楽しんでいます。

▼五年一昔と云われるこの超スピード時代、二〇年黙々と参禅を続けられた方々、続ける事のお手本を見せて下さいましてありがとうございます。

▼アメリカでBSEが発生。牛肉は輸入禁止となり牛丼が消えた。鳥インフルエンザで鶏肉や卵が敬遠され、豚肉が価格上昇。豊かにみえた日本の食文化の脆弱性が露見した。「五観の偈」にもあるが、「食」を考えるいい機会。

▼当参禅会にはご夫婦で参禅されている方が五組いらっしゃいますが、その内の加藤和子さんが去年一〇月に急逝されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

▼加藤孝さんは供養になると言われ、富澤勇さんと共に今年の年番幹事を引き受けてくださいました。宜しくお祈りします。

▼「明珠」三九号で六月二二日の座談司会者は杉浦上太郎氏でした。お詫びして訂正します。(佇泉)